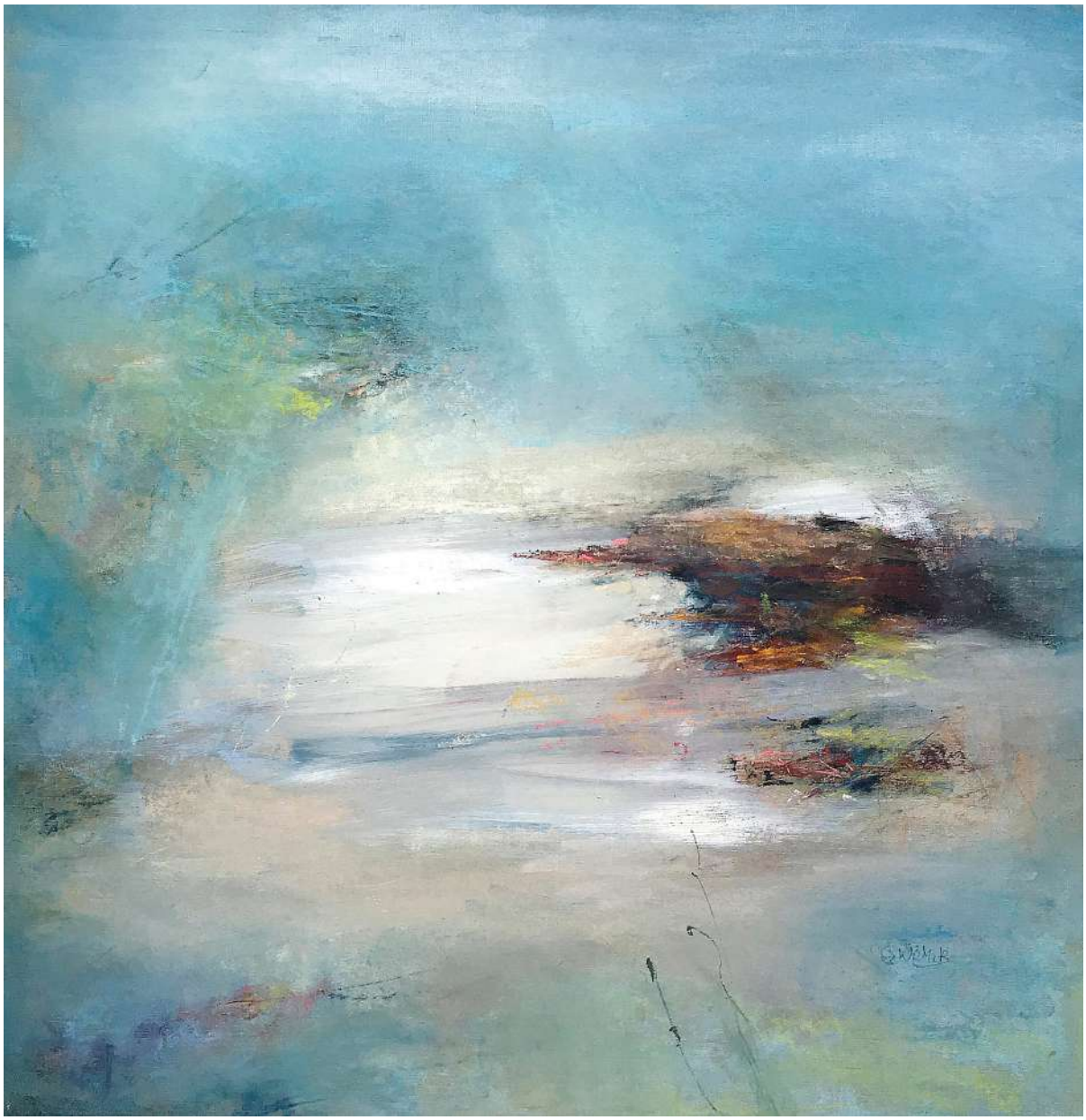
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 79

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2018

目次

1561. 本当の夢

1562. 夢から夢、黒から白

1563. 幻想の向こう側にあるリアル

1564. 6500:2000:3、少なくとも80年

1565. システム的なネットワークとしての知識体系

1566. 文章執筆と知識体系の高度化の関係

1567. ようやく気付いたこと

1568. 名付けられない感情の後ろに

1569. 人間発達や教育に携わる怠惰かつ自閉的な学者と実務家

1570. 第48回国際ピアジェ学会での研究発表に向けて

1571. 先生が伝えたかったこと

1572. 大空を自由に飛ぶ自由

1573. 作曲と数学

1574. 内にある国民性の解体

1575. 科学研究と主観性

1576. 本当の日本人

1577. 目的や理由のない行為と共に

1578. 伝えようとする意志

1579. 霧と内的純化過程

1580. つまらない文章と思考と感覚が萎縮した人々

1561. 本当の夢

今朝は六時前に起床した。あの不安定な天候が落ち着き、今日からは天気が安定するようだ。

書斎の窓の向こう側に広がる景色は、一見すると夜の闇と見間違えてしまう。しかし、そこには早朝の独特の静けさが広がっている。その静けさが視覚的な景色を生み出している。だから、今は夜ではなく朝だということがわかる。

昨夜の夢は、とある進学塾で講義をする役割を担っていた、というものだった。担当講義は数学だったが、受講生の年齢を考えると、算数だと言った方が正確だろう。数人に対して講義することを想定していたのだが、思っていた以上に教室が大きく、講義の開始時間になる頃には、随分と多くの生徒が教室の机に座っていた。そして、生徒だけではなく、保護者の姿も何人か見える。

時間となり、講義を始めようとすると、一人の生徒から提案があった。どうやら、算数ではなく、夢について話してほしいということだった。その提案をしてくれたのは、歌手になることを夢見る一人の女の子だった。彼女の提案は、私たちが就寝中に見る夢ではなく、将来の夢について話をしてほしいということだった。

ちょうど彼女の母親も教室に来ており、どうやら母親もプロの歌手のようだった。その女の子の容姿は日本人だが、彼女の母親は日本語の流暢なアフリカ系アメリカ人だった。その母親も、講義の冒頭に夢について話をすることを望んでいるような表情を浮かべていた。すると突然、私の眼の前に座っていた小さな男の子も夢について話を聞きたいと発言をした。

男の子が座る列の一番後ろの席、つまり先ほどの女の子の横の席に、その男の子の父親が座っていた。不思議なことに、その男の子の容姿も生粋の日本人だったが、その子の父親もアフリカ系アメリカ人であり、とても恰幅が良かった。その父親は銀行員ということがわかっており、どうやら息子には名門校に入学してほしいようだった。

男の子の父親も、講義の始めに夢について話をしてほしいと英語でリクエストをしてきた。それについて英語で返答をすると、その父親が「あなたの英語はイギリス英語のように聞こえますね」と述べ

た。私はそれに対して、「そうですか、それは妙ですね。私は米国で教育を受け、英国ではなく米国で生活をしてきたのですが」と笑みを浮かべながら返答した。

教室にいる全員が英語を理解することができるため、英語で講義をしても問題はなかったのだが、生徒たちが日本人だということもあり、そこからは日本語で話をすることにした。生徒や保護者からのリクエストに応える形で、私は夢について話をし始めた。しかし、このようなお題で話をすることになるとは思ってもいなかったため、どこから話をしていけばいいのか少し迷っていた。

教室の左端の列の真ん中に座っている男の子が、夢はあるのだが、ついつい諸々の誘惑に負けてしまうということを話してくれた。その話を聞いていたその他の生徒たちは、彼の話に同意するかのように首を上下に動かしながらうなづいている。夢はあるのだが、誘惑に負けてしまうというのは確かによくあることだと私は述べた。

そこから言葉を慎重に選びながら、「しかし、誘惑に負けてしまうような夢は夢だとは言えない」という趣旨の事柄を述べた。教室内に少しばかり緊張が走る。

ただし、それは驚きに伴う緊張感、あるいは何かにハッと気づかされた時に生じる緊張感だった。ほんの少しの時間、私を含めた教室の全員が、この緊張感の余韻に浸っていた。

私は再び口を開き、「夢が夢として認識されているのなら、それは本当の夢ではなく、偽物の夢だ」と述べた。再び教室内に緊張が走る。

だが、今度の緊張感は何かに気づかされた驚きの緊張感のみならず、言わんとしていることの重要性を確かに感じるのだが、その真意がわからないといった謎に直面した時の緊張感でもあった。

そこからさらに私は、「何かを成し遂げようとする際に、それを成し遂げようとする意志に気付けてしまうぐらいの夢は夢ではない。本当の夢は意志そのものであり、夢に向かって生きるというのは、向かうことのできない、自分の内側に常にある絶対的な意志に基づいて生きることだ」ということを述べた。その瞬間、教室にいた全員が何かから目覚めたようだった。そこで私は夢から覚めた。

© YOHEI KATO 2018

「夢が夢として認識されているのなら、それは本当の夢ではなく、偽物の夢だ」という夢の中の自分の発言に唸ってしまう自分がいる。夢の中で取り上げられた「夢」とは、一般的に言う「将来の夢」と命名されるものだ。しかし、それを「就寝中の夢」に置き換えてみても、同じことが言えるのではないかと思った。すなわち、昨夜の夢を夢として認識した瞬間に、それはすでに夢ではないのだ。偽物の夢だと言いたいところだが、昨夜の夢は夢の虚偽性を超えて、リアルなものに変容したと言っていいかもしれない。

本当の夢は透徹な意志そのものであり、真の夢はそもそも見ることなどできないのかもしれない。2017/9/19(火)06:50

No.207: Unsolvable Inner Issues

I often wonder when my writings start to transcend personal issues to societal ones. Probably, it heavily relies on the degree of my maturity. Immense agony sometimes captures me regarding my inability to write about collective issues in the modern society.

If my immaturity prohibits me from doing it, I still have to continue to walk on a path to deepen myself. Someday, I will commence to write for our society after reaching universal truth by writing down my unsolvable inner issues. 07:23, Thursday, 9/21/2017

1562. 夢から夢、黒から白

真っ黒な世界から真っ白な世界への変貌。早朝の闇がゆっくりと消えていくのに応じて、世界が白に包まれ始めた。今朝のフローニンゲンは、深い霧に覆われている。書斎の窓を通じて見える景色は、普段のものと随分異なる。いつもは見える赤レンガの家々が霧に覆われ、その姿を確認することはほとんどできない。かろうじて、目の前の通りに植えられた木々の姿を確認することができるだけだ。

秋も近づき、これから紅葉に入ろうとしている木々は、それでもまだ青々としていて、青の深さがさらに濃く感じられる。とても幻想的な世界。その表現はありきたりであり、陳腐なものだが、それ以外に表現は見つからず、むしろその表現は今目の前に広がる景色の本質を突いている。ある表現が本

質を突くとき、その言葉がいかに使い古されていようが関係なく、陳腐さの表皮から脱皮し、新鮮なものに映る。

早朝の真っ白な世界に吸い込まれていく感覚は、闇夜の真っ黒な世界に吸い込まれていくのとはまた異なる感覚を引き起こす。だが、どちらもその世界の中に私を呼び込み、その世界と一体となることを促す。私はしばらくの間、この深い深い霧に覆われた幻想的な世界の中に入り、その世界と一つになっていた。

一羽の黒いカラスが一つの木から別の木に飛び移った時、その世界から抜け出して、再び書斎の中の世界に私は戻ってきた。

先ほど思い返すことを止めた昨夜の夢が、また私の関心事項として浮上し、その夢の後に見た夢を思い出させた。夢の中で私は、波の穏やかな瀬戸内海の磯場で釣りをしていた。

友人らしき姿が二、三人ほど見えるため、彼らと一緒に釣りを楽しんでいるのだろう。どうやら私は釣竿を持っておらず、磯場の様子を眺めながら、どの地点に魚がいそうかを考えているだけのようだった。

ある友人が釣竿を磯場に放置したままで別の友人と話をしていることに気づき、私はその釣竿を持ち上げてみると、魚が掛かっていることに気づいた。すかさず遠方にいる友人にそれを知らせ、私はリールの糸を巻き始めた。この感触からすると、かなり大きな魚が掛かっていると思われた。魚が海面に現れるか否かのところで、急に糸を巻くリールから重みがなくなった。

その瞬間に私は、「魚を逃したか」と思った。しかし、最後までリールの糸を巻いてみると、金色のルアーにとても小さな魚が掛かっていることがわかった。金色のルアーが太陽の光を反射し、鮮やかな黄金色を輝かせている。そのルアーに掛かった小さな魚も、全身がとても鮮やかだ。

4cmほどのルアーと全く同じ大きさの小さな魚を足場に引き上げた時、私はしばらくその魚をじっと眺めていた。その魚は陸に上がってからも、威勢良くバタバタと動き回っている。その魚は綺麗であったにもかかわらず、私はあまりその魚を触りたくなかった。しかし、この魚は私たちが釣ろうとしている種類のものではなかったから、リリースしようと思った。

© YOHEI KATO 2018

早くリリースをしてあげなければ、陸で死んでしまう可能性があったため、駆け寄る友人の到着を待つことなく、元気良く動き回るその魚の体を押さえ、ルアーから外した。その魚を海に帰そうと思った瞬間に、その魚が自分の手からこぼれ落ち、磯と磯の小さな水溜りの中に落ちた。

すでにその魚は弱っており、それは水溜りの底に向かってゆらゆらと沈んでいった。ゆっくりと沈んでいく小さな魚を見ながら、私はとても物悲しい思いに包まれていた。

すると突然夢の場面が変わり、私は首都高速を走る一台の乗用車の後部座席に座っていた。高速で過ぎ去っていく街の景色を眺めていると、右手に巨大なビルが見えた。そのビルの全ての階はガラス張りになっており、全階が本棚と無数の書籍で埋め尽くされていた。どうやらそれは巨大な書店のようであり、書店の本棚は非常に綺麗な形で並べられているのが遠目からわかった。また、その書店に置かれている全ての本は和書であることもそれとなく理解した。

首都高速を走る車の中から、その巨大なビル型の書店を見たとき、そこに通うことができる人たちを羨ましく思った。しかし私は、あのビルを遥かに凌ぐ巨大な図書館の中でこれから生活を始めることを知っており、羨む気持ちを抑えていた。また、そのビルは結局日本語空間の中にあるものであり、私は英語空間の中で探究を続けることを知っていたため、あのビルを羨む必要など一切ないと思い、視線をそらして前方を向いた。

その瞬間に夢から覚めた。夢について講義をする夢に続いて見た、二つの夢もまた印象に残るものだった。

顔を上げ、書斎の窓の外を見ると、幻想的な白い世界がまだそこに広がっていた。2017/9/19(火)07:44

No.208: The Invincible Subjective Fact

Nameless feelings sometimes come through myself. The source of those feelings is already detected. It derives from the fact that I cannot live in Japan as long as I devote myself for my mother country. Needless to say, the fact is not objective but subjective. Yet, the intact

subjective fact is invincible. It generates the paradoxical situation that I cannot lead a life in Japan if I maintain my will to connect with Japan deeply.

Once I relinquish my will, the day when I come back to my mother country may come. However, it will not come soon. 07:39, Thursday, 9/21/2017

1563. 幻想の向こう側にあるリアル

自分が今このようにしてオランダで生活をしていることが、ときにとても不思議に思う。先ほど書斎の窓越しから、道行く人を何気なく眺めていると、改めてそのようなことを思った。そして、私が今オランダという国にいることが、とても愉快なことのように思え、思わず笑みがこぼれた。

一体自分は、どこからどのようにしてここに来て、一体何に向かって今日という一日を過ごしているのかという問いは、日々様々な場面で立ち現れる。今日という一日が、どこからかやってきて、またどこかに向かっていくのを感じながらも、一方で、全く動かずにたたずむ今日という一日の中で、常に自分は生きているような感じがするのである。

早朝からフローニンゲンの街を覆っていた霧が徐々に晴れてきた。霧が晴れるに従って、様々な生き物たちの姿が見え始めた。目の前に見える木々の上の方に小鳥が止まり、か細く、それでいて透き通るようにはっきりとした鳴き声を発し始めた。

欧州での生活を始めて以降、私は頻繁に、自分の生の奥深くに入っていき、生を通じて自らの生を生きているという強い実感を得ることが多くなった。ここで不思議なのは、そうした実感にはいつも決まって、自分が生きているのかわからなくなるような感覚が伴うことだ。つまり、生の通常感覚を超えたところにある生の充実感に触れる時、生きているという実感そのものが、実はそれほど明確なものではなくなるのである。生の本質的な実感とは、ひょっとすると、何か明瞭な強い感覚というものではなく、もっと素朴な自然なものなのかもしれない。

自分が本当に生きているのかわらかなくなる感覚というのは、死の擬似的な体験だと捉えていいかもしれない。そのように考えると、生の本質的な実感は、こうした死の先取り体験の中に芽生えるものなのではないか、という思いが湧き上がってくる。

早朝の霧はほとんど晴れた。一方、私の全身は、まだ不思議なものに包まれている。

先ほど、幻想的な景色が残っている最中に朝食を摂っていた。そこでふと、この現実世界の幻想性を指摘する人の発言には慎重にならなければならない、と思った。ある人が「この世界は幻想である」と述べるとき、その人はこの世界が内包する幻想性を見誤っているように思える。私たちは、幻想性を生み出すリアルなものを見なければならない。より正確には、幻想を生み出す幻想の奥にあるリアルを捉えなければならないのだ。でなければ、「この世界は幻想である」という部分的な真理に全てが飲み込まれてしまうだろう。

幻想を作り出す「それ」を特定しなければならない。あるいは、幻想を生み出す「それ」を作り出している基底を発見しなければならない。でなければ、この世界は虚無に帰してしまう。リアル以上にリアルなこの世界の真相を見るように努めることは、そうした乱暴な虚無的思想に対抗するために無くてはならないものだろう。それよりもむしろ、リアル以上にリアルなこの世界の真相こそが、死の先取りとして縁取られた生の本質的な実感をもたらすものだと思うのだ。2017/9/19(火)09:23

No.209: Specifying Philosophical Discourse Domains

I was reading a book of philosophy addressing general concepts and arguments. I realized that my main interest did not exist in general philosophical discourses. I need to specify a domain of philosophical discourses in which I want to participate.

The choice is simple, and the domain should be philosophy of education. Since it still has diverse discourse areas, I have to pinpoint the chief discourse domains that I really want to join. 11:43, Thursday, 9/21/2017

1564. 6500:2000:3、少なくとも80年

気がつけば、今日も一日が終わりに近づいている。時刻は午後の八時を過ぎ、辺りがすでに薄暗くなり始めている。先ほど、西の空に、夕日で赤紫色に照らされた美しい空を見た。ホログムラのように輝くあのような空を見たのは随分久しぶりのことなのではないかと思う。

今日は午前中から文章を書くことに従事し続けるような一日であった。現在履修中のコースの中でも、とりわけ「評価研究の理論と手法」のコースの課題は、比較的多くの文章を書くことを要求している。このコースでは、自由記述形式の最終試験に加え、教育問題に関する一つのケーススタディに対して、毎週のクラスのトピックに応じて、ケースに対する分析をレポートの形にまとめていくことが課せられている。

今週の課題は、四つの問いから構成されており、それらの問いへの回答で課せられている字数の上限値を合計すると、2,000字ほどになる。これから五週間に渡って、同じケースに対して、異なる角度から同様の分量を要求する課題が出されるであろうから、結局この課題は合計で10,000字ほどの上限値を持つことになるかもしれない。

昨年執筆した修士論文の上限値は、まさに10,000字であり、下手をすると、これから五週間ほどの間に、修士論文一つほどの分量の文章を執筆することになるかもしれない。今回の課題の文字数の上限値が2,000字ということだけであり、当然ながら上限値よりも少ない形でレポートを提出することになるだろう。そのため、厳密には修士論文ほどの文章を書くことにはならないと思うが、それに準ずるぐらいの文章執筆が課せられていると言っても過言ではない。

今日もまずはドラフトがてらに文章を執筆し始めたところ、書くことを止められなくなり、結局、1,400字ほどの文章を書いていた。また、それに並行して、とりとめもない英文日記を500字ほど書き留めておいたため、合計で2,000字ほどの文章を書いていたことになる。

今の私は、科学論文を書くための、自分の専門領域に関する知識が圧倒的に欠落しており、自分を捉えて離さない主題を明確にすることがまだ不完全だという課題を抱えている。しかし、ひとたびこれらの課題を解決することができたら、本当に少なくとも隔週で査読付き論文を執筆できるようになるだろう。もしかしたら、毎週一本の論文を書くことができるかもしれない。

実際に、本日はランニングに出かけたり、作曲実践を行うことも挟んでいたにも関わらず──むしろそれらの実践を取り入れることが良い気分転換になっているのかもしれないが──、2,000字ほどの文章を自然と執筆していた自分がいるため、一週間に10,000字ほどの英文を書いていくことは、正直なところ全くもって苦ではない。

© YOHEI KATO 2018

10,000字ほどの分量を呼吸をするのとほぼ同じ感覚で書いている自分を見ると、あとは自分の専門領域に関するより深い知識の獲得と研修手法への習熟、そして何より研究主題の明確化を行えば、絶えず論文を書き続けるという日が実現する景色が開けてきた。

10,000字の論文というのは、実は分量が少々多いため、そうなってくると、数年後、もしくは10年後あたりからは、毎週一本の論文を執筆するような平凡な学術生活を営んでいるかもしれない。正直なところ、もっと激しくていいかもしれないと思う。毎週にたった一本の論文しか書かないというのは、内側に湧き上がる熱情に蓋をするようなことを意味しているように思えて仕方ない。人生のある時期においては、二、三日に一本の論文のドラフトを書き上げるようになる気がしている。しかも、それは自分に無理をさせる形ではなく、三食食事を摂るのと全く変わりのない当たり前さの中で行われるような気がしてならない。

今、日々を生きて行く中で最も困難なことは、執筆衝動を抑えることである。来るべき時に、この執筆衝動を完全に解放してしまおうと思っている。自己が文章の執筆行為の中に溶解し、気づけば自分の存在が文字だったという状態を望む。また、文字だけではなく、日々絶えず曲を生み出す日が近い将来に到来すれば、自分の存在が音だったと思える状態になるだろう。激しさが欠落していて面白みに欠けるかもしれないが、とにかく私は後少なくとも80年間ほど、文章と曲を作り続けることだけに従事したい。

一過性の激しさではなく、永遠の継続性を優先させたい。であれば、毎日、日本語は6,500字、英語は2,000字ほどの執筆に留め、曲は3曲ほど作るだけに留めることが望ましいかもしれない。そうであれば、全く無理をすることなく、後80年間ほどは創作活動に従事できるような気がしている。
2017/9/19（火）20:42

No.210: Existential Heaviness

How can we tolerate our selves? The question was casted upon me in the dream last night.

People in the modern society are struggling with finding out their true selves, but my question is whether they can really endure themselves after discovering their true nature. It means that our true selves have much more existential seriousness than we think. I guess that most people

cannot bear the heaviness of their true selves even if they discover them. 11:04, Thursday, 9/22/2017

1565. システム的なネットワークとしての知識体系

昨夜は一日の最後に、今後の創造活動に関する事柄を書き留めていたように思う。それが影響をしてか、昨夜の夢の中にも同様の主題を持つであろうシンボルが現れた。

夢の中で私は、主題の類似性を明確に認識していたことは確かなのだが、それがどのようなシンボルであったかを具体的に思い出すことができない。ただし、「創る」ということに関して、啓示的な気づきをもたらすものであったことを覚えている。夢の中の私は、どこか雷に打たれたかのような状態になっていた。おそらくこの状態とそこで得られた気づきは、今後の覚醒状態の中で徐々にその姿を表すことになるだろう。

昨夜は就寝前に作曲実践に従事した。学術研究の休憩がてらに、午後に一度、音楽理論に関するテキストを読むことを行っていた。音楽理論に関する既存の知識のネットワークの中に、再び新しい知識が組み合わさっていくかのような感覚があった。むしろ、学習をそのように進めようと意識する自分がいる。これはおそらく、現在履修中の「学習理論と教授法」というコースの影響によるものかもしれない。このコースを履修しながら頻繁に思うのは、自分のこれまでの学習方法には見直すべき点が多々あり、学習理論は自分の探究をより深くしてくれることに非常に有益だということだ。

ネットワーク科学と教育科学を架橋させるような発想を昨年の秋あたりから持つようになった。人間の発達現象をダイナミックシステムかつダイナミックネットワークとして捉えるという発想が芽生え、それに関する探究が始まったのはその時期だったと記憶している。システム科学とネットワーク科学の観点から人間の発達を捉えた時、知識体系というシステムかつネットワークがより高度なものになっていくためには、何はともあれ、既存のシステム的なネットワークの中に、いかに新しい知識を組み合わせていくかということが重要になることがわかる。

以前に言及したように、多くの人は、どうしても「銀行型学習」を行ってしまいがちだが、そのような学習方法を採用していては、システム的な知識のネットワークは強固なものに育っていかない。要諦

は、新たな知識項目に対して、いかに自らで意味付けを施し、その知識項目を自分が付与した意味と共に、既存のネットワークに結びつけていくことだ。

昨日も、音楽理論のテキストを単に読み流すということをせず、それぞれの項目に対して自分なりの意味付けを施しながら、すでに構築してきた知識のネットワークと関連づけるということを意識していた。すると、徐々にではあるが、確かな手応えとともに、音楽理論に関する自分の知識体系が育っていることを実感することができる。発達や学習は、徐々に進むことが本質であり、ゆえに緩やかに進めていくことがカギを握る。

この緩やかな流れの中に、知識項目が徐々に自分の内側に定着していくのである。就寝前に行っていた作曲実践に関しても同じである。それぞれの項目を、自ら手を動かしながら、試行錯誤を行う過程の中で意味付けを行うことによって、作曲の技術が自分のものになっていく。音楽理論のテキストのみならず、シンガポール国立大学が提供するオンライン作曲講座も三回目の繰り返しとなった。

三回目の学習は、二回目までの学習ではあえて焦点を当てなかった、細かい応用的な知識項目にも光を当て、それらをこれまで習得した知識項目と結ぶ付けていくことを意識したいと思う。オンライン作曲講座の三回目が終わる頃には、一つの曲を適切な形として残せるようになっていることを願う。2017/9/20（水）07:11

No.211: Message from The Dream

Can we fly in the sky? Yes, we can. However, we often forget that the vast sky always exists over our heads. Furthermore, we almost always forget that we have the right to fly in the sky.

The modern society beclouds our eyes so that we cannot notice the sky. It also guilefully conceals our right to fly in the sky.

The dream I had last night told me that we had to wake up to see the sky. Moreover, we should remember that we always have the right to fly in the sky. 11:12, Thursday, 9/22/2017

1566. 文章執筆と知識体系の高度化の関係

昨日は、具体的な課題に取り組みながら学習を進めていくことの重要性を改めて実感するような体験をした。昨日の午前中から、「評価研究の理論と手法」というコースの課題に取り組んでいた。この課題は、メキシコの国家規模の教育問題をケーススタディとし、毎週のクラスで学習する項目をもとに、いくつかの質問に回答していくというものである。設問事項の字数制限を見たときに、それほど分量が多いとは感じなかったが、実際に文章を書いてみると、随分と分量の多い文章を書かせることが要求されていることがわかった。

昨日私が実感していたのは、単にテキストを受動的に読ませるのではなく、また、単に講義を受動的に聞かせるのではなく、このような形で具体的な課題を提供しながら、学習した項目をもとに文章を書かせることの意義である。

ケーススタディに取り組む過程の中で、必然的にテキストに立ち返ることや、講義資料に立ち返ることになった。具体的な課題に対して、試行錯誤し、学習済みの項目を思い出しながら文章を書いていくことは、学習した知識項目を確かなものにする上で極めて大切である。ここにはいくつかのポイントが含まれており、具体的な課題に取り組むことは、拙書『成人発達理論における能力の成長』において、能力の成長における肝であることを述べていたように思う。こうした具体的な課題に取り組むとき、私たちは必然的に、以前に構築した知識やスキルを再想起することを余儀なくされる。

とりわけ、知識体系を構築していく際に、これまでに習得した知識項目を再想起することは、知識のネットワークをさらに密なものにする上で大切になる。一つ一つの設問に取り組む過程の中で、自分の記憶の中にある知識項目を再度引っ張り出すことによって、知識のネットワークの回路が太くなっている実感がある。また、既読済みのテキストや講義資料を再度読み返すことによって、ネットワークを構成する知識項目に対する理解がさらに深いものになっていく確かな手応えがある。こうしたプロセスを経ることによって、自分の内側の知識体系の部分と全体が徐々に高度なものになっていくのを実感していた。

しかしながら、知識体系を涵養していく際に、黙読をしているだけでは全くもって不十分であることにも気づかされる。昨日取り組んでいた課題が優れているのはまさに、ケーススタディという現実世

界に立脚した問題をテーマに据え、課題に取り組む過程の中で、すでに学習した項目を再想起させることを促すことのみならず、設問に対して自分の言葉で文章を書かせる点にあったと言えるだろう。この課題の優れている点は、学習項目の再想起と再構築にあると言える。つまり、知識項目を再想起することに付随して、再想起された事柄を活用しながら、自分で知識を再構築していくのである。

とりわけ再構築のプロセスを推し進めていたのが、まさに文章を執筆するということだった。ここ最近、自分が文章執筆における構築性の虜になっているのを感じていたが、まさに文章を書くというのは、自分で再構築作業を行うことに他ならない。

おそらく、学習項目を真に血肉化させるためには、再想起だけでは不十分である。堅牢な知識体系を築き上げていくためには、文章執筆を経た再構築作業に従事することが不可避に求められると思う。その他の発達現象を含め、知識体系が発達していくプロセスは建築的なものであり、文章を執筆するという行為の本質に建築性という特徴があるがゆえに、文章執筆と知識体系の高度化は密接な関係を持っているのだろう。2017/9/20(水)07:39

No.212: Slow Life

I am intentionally spending the time of today at a slow speed.

We are often blind of our rapid consumption of time. The pathology can be seen anywhere in industrialized countries. I want to purposely confront with it.

I will read slowly a Japanese book after a long time, which would make myself and even my time deeply relaxed. Loosening ourselves and our time perception may not be a panacea but a remedy for the tendency to urge us to recklessly consume our precious time. 13:04, Thursday, 9/22/2017

1567. ようやく気付いたこと

朝と夜のみならず、日中の気温も下がり始め、外出中に長袖だけでは寒くなってきた。実際に、道行く人たちのほとんどはジャケットを羽織り始めている。

今週はもう外出する予定はないから、来週から私もジャケットを羽織って出かけることにしたいと思う。今日は午前中に、「実証的教育学」の二回目のクラスに参加した。つくづく、このクラスは内容がよく練られていると思う。各回のクラスで出される課題をこなしながらコースを進めていけば、実証的教育学に関する理論が自然と身につくようなカリキュラムが組まれている。

もちろん、昨年私が所属していた発達心理学科のプログラムにおけるどのコースもよく練られたものだったが、今回のプログラムは教育学科に属するものであり、教授陣が学習理論や教育研究に精通しているためもあってか、どのコースもカリキュラムが洗練されている。

私自身もカリキュラムを作り、教育プログラムを提供することもあるため、現在履修しているコースのカリキュラム設計は非常に参考になる。単純に、どのような内容のコンテンツが提供されているかに着目するのではなく、それらのコンテンツがどのような順番で、さらにはどのような課題と組み合わせて提供されているかに着目する必要がある。また、それらのカリキュラム設計の裏に、どのような学習理論の枠組みや実証研究の成果があるのかを探ってみることも有益だろう。

本日のクラスに参加しながら、講義の内容とは直接関係しない次のような事柄をぼんやりと考えていた。このコースの最終課題では、教育改革を必要とする学校のケースを自分で作成し、それに対して、分析評価と改革案の提示を行っていくことが求められている。最終成果物として、二つの関係当事者に向けてレポートを書くことが要求されている。

一つは、教師を含めた学校関係者に向けてのレポートであり、もう一方は、教育科学者に向けてのレポートである。後者のレポートは、多くの学術論文が採用するAPAスタイルに則って執筆することが要求されている。しかし、前者のレポートは、APAスタイルを用いてはならないことになっている。この制約条件は非常に面白い。

これまで欧米で三つの修士課程に在籍してきたが、どのコースにおいても期末レポートはAPAスタイルに従わなければならなかった。将来の研究者や学者を育てるという意味においては、そうした形で期末論文を執筆させるというのは納得がいく。一方、今回の課題では、あえてAPAスタイルを用いないレポートを執筆することが要求されている。日本語の論文でも状況はほぼ同じだと思うが、

APAスタイルで執筆された文章は学術論文の体裁を取るため、実務家や一般の人にとっては非常に読みづらいと感じるだろう。

文章の至るところに、専門書や論文の引用がなされているため、APAスタイルの文章は、学術論文を読み慣れていない者がどうしても敬遠してしまうような類いの文章だと言える。講義の内容とは全く関係のないところで、私は一人ハッとした思いになっていた。

これまでは、何も意識することなく学術論文を読み、学術論文を執筆してきたが、それらの文章形式は、特殊な情報資源であることにようやく気付いたのである。つまり、そうした文章は、学術論文を読みこなすための特殊なリテラシーがなければ、アクセスできない類いの情報媒体なのである。このような当たり前なことにようやく気付いた。例えば、今回の課題で要求されているレポートをAPAスタイルで執筆し、それを学校関係者に単に手渡しても、ほとんど読まれることはないのではないかと思う。

ここに、今回の課題が要求していることの意図があるように思う。要するに、学術論文を読み慣れていない実務家に対しては、彼らに伝わりやすい形の文章を執筆していく必要があるのだ。これは何とも当たり前のことなのだが、日々学術研究に従事していると、とかくこのような当たり前のことすらも忘れてしまいつつある自分にようやく気付いた。思い返せば、七年前の私も学術論文には全く無縁な実務家だったのだ。

学術研究に従事すれば従事するほどに、自分の専門分野の研究内容の性質を考慮に入れると、研究で得られた成果は企業や学校を含め、実務の世界に還元していく必要があることに気づかされる。その際に、必要な関係者に適切な形の文章で研究成果を伝えていくことが何よりも重要である。おそらく、今後の私に求められるのは、発達科学や教育哲学を通じて得られた知見を、学術論文のみならず、しかるべき文章形式でそれを適切な関係当事者に伝えていくことなのかもしれない。そうなってくると、様々な文章表現技法を今後も磨いてく必要がありそうだ。2017/9/20（水）20:12

No.213: Importance of Not-Doings

We are apt to seek for doings. For example, we are often eager to find out what we have to do for accomplishing something.

The situation can be seen many times in the field of education. People are desperately looking for what they should do to develop themselves or their children. However, why don't we stop seeking for doings? Of course, we cannot completely end finding out doings, but I want to insist that we have to loosen our impulse to seek for doings.

After relaxing our drive to seek for doings, we need to consider what we should not do. Since we are seeking creatures, it is difficult to stop seeking. If so, let's just seek for not-doings. 13:43, Thursday, 9/22/2017

1568. 名付けられない感情の後ろに

今朝の未明に少しばかり奇妙な体験をした。夢を見ている意識と夢から覚めた意識との狭間の状態にいるとき、頭の中には時刻を表すいくつかの数列があった。それは、2:22と5:55という時刻を表す数列だった。2:22という数列が頭に思い浮かんだとき、目を開けて時刻を確認するとその時間だった。

起床するにはまだあまりにも早い時間だったため、もう一度眠りにつこうとした。すると無意識的に、「今から二回ほどレム・ノンレム睡眠を経て、5:55に起床しよう」と思った。まさに、先ほど自分の脳裏に浮かんだ数列に引き寄せられるかのように、次に目覚める自分の時刻を設定したのである。

すると突然、寝室ではなく、書斎の方から何か物音がした。このような早朝の未明に聞こえてくる物音は不気味であり、家の構造的にも確率的にも泥棒がこの家に入ることはほとんどないであろうはずなのに、ありえないものをありえるものに変える想像力が働いた。結局、その物音に無関心さを装い、私は再び眠りの世界に入っていくことにした。再度目を覚ましてみると、先ほど目覚めることを意図していた5:55ではなく、5:57だった。そこから10分ほどベッドの上で、何も考えようとすることのない考え事の中にいた。

めっきりフローニンゲンの朝は寒くなった。もう暖房をつけることが当たり前となっている。闇に包まれた早朝の空を見ながら、黙想的な思考に耳を傾ける。自分にはそれしか聞こえないからだ。

昨日もまた、母国から随分と遠い場所で、精神的には日本の近くで仕事をしている自分について思いを馳せていた。結局、自分はこのような形でしか自分の国に関与できないのだという確認が行われた。これはこれまで何度も行っている確認であり、もはや不必要なのではないかと思われるほど、この確認が何度も行われる。日本に向けて仕事をするためには、日本にいてはならないという確認が何度も上塗りされていく。

日々、自分の内側に知識や経験の体系が構築されていくよりも速い速度で、その確認が積み重なっていくかのようだ。絶えず自国に接しながら日々生きるためには、自国にいることが決してできないというこの感情を表す適切な言葉が見つからない。「哀しみ」や「苦悩」という言葉が真っ先に思い浮かぶが、それらの言葉も自分の感情の表層を撫でるだけである。探しても探しても、言葉が見つからない。

もしかすると、探すという行為がもはや無意味なことなのかもしれないと思い始めた。精神を深く自国に根ざした形で生きるためには、身体を自国に置いた形で生活することができない。自己の精神が母国から抜けないところにまで深く根を下ろすまで、身体を日本に置いて生活することはやめようという思いは、ある種の覚悟だったのかもしれない。

「覚悟」という言葉には、「輪廻のサイクルを超える至福」という意味があるようだ。

日本を離れて欧米で過ごす日々の中で、私は随分と新たな日本語を学んだと思う。それは単純に字義的な意味だけではなく、存在的な意味に関してもだ。覚悟というのは、どうやらあらゆる言葉をかき消すようだ。自国に対して精神の根を真に下ろして生活を営むためには、自国にいることはできないということに伴って湧き上がった感情に、名前がつけようのなかったのは、覚悟という言葉の持つ本質的な作用によるのかもしれない。

名付けようのない感情の背後にあったのは、覚悟であり、「覚悟」という言葉であった。2017/9/21（木）07:08

No.214: Difference between Composing Music and Solving Mathematical Equations or Puzzles

In the afternoon, I learned music composition to take a rest for my work.

I continue to learn voice leading. As I mentioned—as most people might say—, music composition is like solving mathematical equations or puzzles. I am like those who feel enjoyment and relief in solving mathematical equations and puzzles.

Composing music and solving mathematical equations or puzzles are quite similar, but I can find the difference between them in that the former includes creation in the process. On the other hand, the process of the latter contains dissolution or resolution. That is the difference of what I feel when I compose music and solve mathematical equations. 17:30, Thursday, 9/22/2017

1569. 人間発達や教育に携わる怠惰かつ自閉的な学者と実務家

今日は午前中に、実証的教育学に関する論文を三本ほど読んだ。以前に言及したように、今学期は、履修しているコースで取り上げられる専門書と論文に焦点を当て、できるだけそれら以外の文献を読まないようにしていた。だが、今朝は一冊ほど哲学書を読んでいる自分がいた。その書籍は、以前から関心を持ち続けている教育哲学に関する内容ではなく、哲学上の古典的なテーマを扱った内容だ。

午前中に読んでいた論文とこの哲学書が引き金となり、昨日考えていたことの続きを考え始めていた。それは、科学論文や哲学論文の持つ意義に関する問題である。私は時に、科学論文や哲学論文の価値に疑問を持つことがある。その背景には、昨日言及したように、それらの論文が限られた人にしか読まれないという問題がある。

科学論文や哲学論文は、確かにその領域に新たな知見を加えることが大事な役割の一つだろう。しかし、科学にせよ、哲学にせよ、それらの探究で得られた知見がこの具体的な社会の中に還元されていかなければ、どこか非常に虚しい営みのように思えるのは私だけだろうか。

今朝読んでいた論文の中で、教育研究と教育実践の間に大きな溝がある問題が指摘されていた。その問題の根幹には、教育研究の知見が、専門家以外の人間には読みづらい言語と体裁によって論文としてまとめられ、さらにはそうした論文が掲載されているジャーナルは、ほとんどの教育実務家に知られていないことが指摘されていた。これはとても大きな問題のように思える。

自分について振り返ってみた時に、今から四年前、私は学術機関に属することなく実務と研究を進めていた。学術論文を参照しようと思った際に、多くのジャーナルはアクセス権が有料であり、下手をすると一本の論文が巷で売られている書籍と同じぐらいの値段で課金されていることがよくあった。確かに、インターネットの世界にはPDFで無料で読める論文が数多く存在しているが、実際にはそれらは科学的な知の氷山の一角にすぎない。多くの論文は依然として、一般の人の目に止まらない形で存在しているというのが実情だ。

人間発達や教育に関する科学論文や哲学論文は、実務の世界の人間に読まれ、それらの知見が実践に活用されてこそ価値を有すると思うのだ。しかし現状は、それらの論文の存在は実務の世界の人間に知られることはほとんどなく、仮に知られたとしても、論文を構成する言語と体裁が実務家を寄せ付けないような特徴を持ってしまっている。

人間発達や教育に関して探究を進める学者は、一体何を目的に研究を進めているのだろうか。現代の学術世界にはびこる悪しき文化の一つは、実務家にその存在すら知られていないような、それでいて学者の間では名の通ったジャーナルにいかに多くの論文を載せるかが、学者としての評価を決定する仕組みが採用されてしまっていることだろう。つまり、現代の学術世界は、評価の仕組みに関して、いかに多くの金銭を獲得するかが賞賛される金融資本主義の経済世界とほぼ同じ特徴を持っているように思えてしかない。こうした悪しき文化は、学者が実務家の存在を考慮することなく、専門家だけに共有される、閉じられた論文を執筆する意欲を掻き立てる温床となっているのではないだろうか。

学術の世界と実務の世界を架橋することは、口で言うほど簡単ではないが、とりわけ人間発達や教育の領域では、早急にそれをしなければならない状況に私たちは置かれているように思う。それらの領域にいる学者も実務家も、あまりに怠惰であり、自閉的すぎるのではないだろうか。2017/9/21（木）12:52

【追記】

私がここ八年以上も継続して仕事を追っている哲学者にザカリー・スタインという人物がいる。彼は以前、一般的にはアクセスできないインターネットの世界「ダークウェブ」になぞられて、アカデミックな世界の知見がダークウェブ化していることを指摘していたのを思い出した。まさにスタインが述べ

ていることが上記で指摘した内容である。インターネットの世界に表層的な情報が日増しに増えていく一方で、ダークウェブ上での活動が活発になっていくのと同様に、学術的な知に関しても、世間に知られるのは本当に表層的な知であり、一方で誰にも知られないような秘教的な知が「アカデミック・ダークウェブ」上にどんどんと蓄積されていく様子を見て取ることができる。問題は、学者も一般人もこのことにあまりにも無自覚であることだと思う。

No.215: Importance of Blank Space for Our Learning and Development

I got up at five o'clock and started today's work at 5:30. I can feel rigorous but silent vitality within me that would propel today's work in a desirable way.

"Spacing" is a key concept and practice in my second year in Groningen. To deconstruct the propensity to work hard, which probably derives from the national character of Japan, is inevitable if I deepen myself.

It is important not only to cultivate my existence but also to construct my knowledge system. Learning and development should be done with ample blank space. It can generate enough room to foster our learning and development. The blank space might look empty, but it actually embraces fullness to support our learning and development. 06:48, Saturday, 9/23/2017

1570. 第48回国際ピアジェ学会での研究発表に向けて

今日も気付けばあっという間に一日が過ぎ去った。顔を上げてみると、書斎の窓の外には暗闇が広がっている。以前は午後10時まで明るかったオランダの空も、今となっては8時を過ぎる頃には、空が闇に包まれるようになった。今日は一日を通して日本語で日記を書き留める時間がなかったため、一日の最後に振り返りとして日記を書き留めておきたい。

本日の予定では、来年の5/31から6/2にかけてアムステルダムで行われる、国際ピアジェ学会で研究発表をするための提案書を作成しようと思っていた。自分の専門領域の学会に参加する際は、もう二度と単なる聴衆として参加しまいと決心しているため、今回の学会においても発表者として応募をしようと思っている。

以前お世話になっていた、マライン・ヴァン・ダイク教授からこの学会について話を聞き、私の研究分野からすると、この学会は私にとって、とても意味のあるものだと思った。今回は48回目の学会ということからもわかるように、この学会の歴史は古い。

ヴァン・ダイク教授曰く、毎回の学会には発達科学の重鎮が多数参加するとのことだが、学会の雰囲気は親しみやすいそうだ。偶然ながら、今回の学会の主催者は、ダイナミックシステム理論を発達科学の研究に適用した第一人者の一人である、フローニンゲン大学のポール・ヴァン・ギアート教授が務める。もし仮に、カート・フィッシャー教授が学術世界から引退をしていなければ、必ずこの学会に参加していたのだと思う。今回の学会には、フィッシャー教授のダイナミックスキル理論に精通している研究者も参加するようであるから、彼らとの意見交換は非常に意義があるだろう。

あえてこの学会に参加する発達科学の重鎮についてはここで列挙しないが、こうした権威ある学会で研究発表を行う機会が得られれば幸いである。発表者として承諾されるかはまだわからないが、とにかく申請をしてみようと思った。

昨年に行った研究内容を発表しようと思っており、改めて研究結果を要約し、本日中にそれを応募書類にする予定だった。しかし、残念ながら、今日はその他の用事が立て込んでおり、応募書類を完成させることができなかった。そのため、明日の午後にでもこの応募書類を完成させたい。今回の学会で研究内容を発表する幸運に恵まれれば、国際学会で発表するのは、昨年の夏に横浜で開催された国際心理学会議以来となる。

学会の開催日までまだ日があるが、来年の国際ピアジェ学会は今からとても楽しみであり、自分にとって一つ重要な学会となるだろう。2017/9/21（木）20:54

No.216: Inevitable Subjectivity in Science

Any scientific research cannot be perfectly objective. It may sound natural for some people, but others tend to believe that complete objectivity is assured in scientific research.

To choose a research topic, research method, and theory derives from the subjectivity of a scientist. Of course, scientists should avoid their subjectivity that distorts scientific

truth. However, subjectivity is inevitable in scientific research. At a collective level, a scientific community shares collective subjectivity, which may be called a paradigm. At both individual and collective levels, subjectivity prevails in science. Therefore, it is not so wise to try to eliminate subjectivity.

I suppose that what scientists must do is communicative dialogue to transform subjectivity into universality. 07:05, Saturday, 9/23/2017

1571. 先生が伝えたかったこと

今日はいつもより多くの睡眠を取った。五時あたりに一度目を覚ましたが、そこから再び眠りにつくことにした。目覚めてみると、辺りがほのかに明るくなっていた。

昨夜は二つの印象的な夢を見た。場所は米国であろうか、あるいは日本のような気もする。一つ言えるのは、その場所を取り巻く文化的雰囲気が、米国的でもあり日本的でもあったということだ。

夢の中で私は一台のバスに乗っていた。全席対面式になっており、右列と左列に座る人たちが向かい合う形のバスだった。バスの乗客はすべて私の知り合いであり、小・中学校の顔見知りの友人だけで一杯となっている。私が座っていたのは、左列の真ん中の席であり、バスを降りるドアが右斜めに見える。

窓から景色を眺めると、バスは閑静な住宅街を走っているようだった。バスの中では、友人たちが楽しく会話をしている。住宅街のある地域に差し掛かった時、一人の中年女性がバスに乗車した。その女性は、購入したばかりの大きな電化製品が包まれた箱を掲げていた。

バスの運転手に賃金を払う際に、その女性は大きな箱を床にドスンと置いた。その瞬間にその女性は、バスが既に乗客で一杯であることに仰天し、不満の顔を見せた。すると突然、その女性が大きな声と共に英語で不満を述べ始めた。その女性は見た目は日本人であるが、彼女の英語の発音は日本語訛りが抜けつつある印象を持った。実際に、バスに乗車している私以外の友人たちは、その女性が日本人のように見えながら、日本人ではない可能性が高いと思い始めているような雰囲気を発していた。

しかしながら、私はすぐにその女性が日本人であることに気づいていた。ほとんど日本語訛りが消えているとはいえ、音の流れに少し意識を向けてみると、やはり彼女の英語は日本人が話すそれだった。

その女性は、重たそうな箱を抱えながら、私が座っているすぐ近くまでやってきた。箱を置くや否や、バスが出発し、それと同時に、その女性は私の左横に座っている友人に突然話しかけた。

女性:「How can I stand for?」

とぶっきらぼうに女性はその一言だけを私の横に座る友人に投げかけた。すると、友人はどぎまぎした様子を見せながらも、すぐさま返答をした。

友人:「Ye, Yes…」

その返答に女性は爆笑し、バスに乗車していたその他の男女の友人たちも一斉に笑い始めた。

友人の一人:「“How”の質問に対して、“Yes”はないやろ(笑)」

という声がどこからか聞こえた。確かに、私も友人の“Yes”という回答には笑いが出そうになったが、英語に不慣れな日本人であれば、そのような回答をするのもそれほどおかしなことではない。

バスに乗っているその他の友人も、実際には英語を話すことができないことを私は知っていた。友人の回答に対して、その女性は機嫌を取り直したのか、今度は私に質問をしてきた。その瞬間、その女性の容姿が随分と変化していて気づかなかったが、中学時代にお世話になっていた英語の先生だということに気づいた。私は先生との久しぶりの再会に嬉しくなり、一気呵成に英語で話しかけた。

先生のみならず、バスに乗車していた友人たちが呆気にとられるほどに、私は怒涛のように英語で話し始めた。友人たちが驚いていたのは、私の人格が真逆に転換したかのように、饒舌に話し始めたことに対してである。私が一気呵成に英語で先生に話しかけたのは、三つの理由があるように思えた。一つは、純粋に再会を喜び、その喜びが自然と溢れたからであった。もう一つは、その女性

が遥か昔にお世話になっていた英語の先生であるということに気づき、彼女が生粋の日本人であることに確信を持った時、「日本人が英語を話すのであれば、このように話せ」という主張を先生にぶつけるためであった。

しかもその主張を、喜びの感情の中に隠し、私の言葉を受けた先生だけがそれを自覚するというような、巧妙な意図が私の中にあった。別の表現で言えば、その主張の裏には、「私はあなたを今後も先生と呼び続けるが、私はもうあなたの生徒ではない」という意味を込めて、彼女に英語をぶつけていたのであった。

三つ目の理由は、人間には別の側面があるということを友人たちに伝えたかったということだろう。特に、精神が別の言語空間に移行すれば、全く別の人間になりうることが可能なのだ、ということを伝える意図があったようだった。それら三つの理由が明確になったところで、一度目を覚ました。

この夢が示唆していることはなんだろうか。改めてこの夢を振り返ってみると、いろいろと興味深いことに気づかされる。最も関心を引くのは、中学時代にお世話になっていた英語の先生が友人に述べた“How can I stand for?”という質問だ。

そもそも、これはどういう意味なのだろうか？前後の文脈が一切ない中で、この文章の意味は何だと言えるだろうか。誰しもすぐに思いつく意味は、直訳的なものとして「私はどのように表すことができるか？」というものだろう。この直訳的な意味の裏に含まれるものは非常に面白い。

一般的に、“stand for”は人を主語に取るよりも、事物を主語に取ることが多いように思う。そこをあえて、主語を人にし、その先生が何を象徴しているかというよりも、どのように象徴しているのか、ということをその友人に問いかけているようだった。

この夢が私の夢である以上、友人に対する問いかけは、私に対する問いかけでもあった。「私はどのように象徴しているか？」という問いかけに対して、自分であれば何と答えるだろうか。とっさに出てきた言葉は、「権威が惨めな形で表れている」「権威が無能な形で表れている」というものだった。これは直感的なものであり、無意識から出てきた言葉だが、そうした自分の言葉の裏には、やはり権威に対する根深い嫌悪感があるようだ。より正確には、無能さを隠蔽しながら権威を振る舞う人物への強い反抗心から、それらの言葉が生まれているような気がしてならない。

© YOHEI KATO 2018

この主題は、これまでの夢にも再々現れている。昨夜の夢も、この主題に関係するものだったのだろう。もう一つ、先生の言葉を別の形で解釈することが可能だと思った。“How can I stand for?”という表現を、「私はどのように耐えることができるか？」と解釈するものだ。

これまで六年間ほど英語空間で生きてきた中で、“stand for”という表現を「耐える」という形で使われているのを見たことはないが、先生の言葉の余韻を考えると、“How can I stand for? I can’t do it.”という反語形式で解釈することができるかもしれない。つまり、「私はどうやったら耐えることができるだろうか？いや、耐えることなどできないだろう」という意味で解釈してみるという見方だ。

ここでも目的語が欠落しているため、何に耐えるのかは明確ではない。もしかすると、自分自身に耐えられるかどうかを示唆しているのではないだろうか、と思わされた。「私たちは自分という存在にどのように耐えることができるのか？」という問いであれば、それは実に深い問いだと思う。合わせて、最初の解釈の目的語を「自己」にしてみると、「私たちはどのように自己を表現することができるだろうか？」という問いになる。この問いもまた、非常に重たい意味を持つものだと私は思う。

この現代社会において、多くの人々は自己を見つけることなどできず、自己を表現することもできない。さらには、自己を見つけたとしても、その重みに耐えられることもできない。自己を見つけ、自己を表現し、自己の重みを受け止めながら生きるということは、とても難しいことなのだ。このような現代社会においては、なお一層それらは難しいことだと思う。2017/9/22（金）08:41

No.217: From Pastiches to Unique Music

I finished morning reading, so I will start music composition for one hour. To compose simple pieces of music is the first step to create complex ones.

Imitating great masterpieces would be an inevitable learning step. An infinite number of pastiches would enable me to create my unique music. Until then, I will not forget persistence and diligence with full of enjoyment. 09:46, Saturday, 9/23/2017

1572. 大空を自由に飛ぶ自由

いつもより多い睡眠時間を確保したためか、朝から気力がほとばしる。早朝の太陽光は、もう秋のそれを伝えている。時刻は午前中なのだが、あえてその太陽光は「ほのかな黄昏色」と表現したい。

来月は自分の誕生月であり、このような優しい雰囲気の中に自分は生まれたのだということを、感慨に浸りながら少しばかり思う。誕生日を迎えるごとに、自分の年齢がわからなくなる。もちろん、今年の西暦から生まれた年を引けば、自分の年齢を算出することができる。

しかし、もはやこのように、自分の年齢を特定するのに一瞬ばかりの計算が必要になってしまった。昨日も、ある日本語の契約書にサインをする際に、今年が平成何年なのかを記載する箇所があったが、もはや平成何年なのかはわからなくなっている。これも計算方法があるようだが、その計算方法も知らない。そのため、インターネットを使って調べると、どうやら今年は平成29年のようだ。平成29年なのだ。

念のため、計算方法を頭に入れておくと、どうやら西暦の下2桁に12を足せばいいようだ。なぜ西暦の2桁に12を足せばいいのかのメカニズムまで理解しておかないと単なる暗記に留まってしまうが、とりあえずその計算式を念のため頭に入れておくことにする。

自分の年齢も西暦も、一つの構成概念であるということを理解し、それらの構成概念が内包する不必要な力に飲まれないように今後も生きようと思う。

昨夜見た二つの夢のうち、先ほど前半の夢について書き留めていた。実は、もう一つの夢の方はさらに印象に残っている。解釈は難しいのだが、夢の中の世界そのものがとても印象的だった。夢の中で私は、空を飛んでいた。

山道を走る国道の上を飛んでいたのである。空を飛ぶ高さと速さを自分でコントロールしながら、自由気ままに私は空を飛んでいた。その整備された国道の山道には、頻繁に車が行き交っていた。私が空を飛ぶ高度を低くした時、山道の後ろから大きなトラックがやってくる姿が見えた。

このままの高度を維持していると、トラックにぶつかってしまいそうだったので、私は速く空を飛ぶのではなく、高度を上げて、引き続きゆっくりと空を飛ぶことにした。無事に、その大型のトラックが私の下を通りすぎた時、山道の後ろから友人の声が聞こえた。その友人は、私が最も仲の良かった親友の一人だった。友人の姿は見えず、彼の声だけが聞こえる。

友人:「僕も空を飛びたいんだ」

私:「簡単だよ。誰でも空を飛べるんだ」

人は誰でも空を飛べる。ただし、空を飛べるということを自覚し、そのための方法を身につける必要がある、ということを私は伝えようとしていた。しかし、私が口を開き、その言葉を述べた瞬間に、私は友人をその場に置いて、一気にどこか別の世界に向かって飛んで行ってしまった。そこで見た景色は絵も言わぬほどに美しかった。

果てしなく広がる大きな海を眼下に、黄色く輝く雲ひとつない空の中を私は優雅に飛んでいた。おとぎの国が実在するのであれば、このような場所のことを言うのだろう。

私は海を越え、別の山にたどり着いた。それは先ほどの山とは大きさも雰囲気も異なり、スイスの夏の山のようであった。山肌に高い木はなく、背の低い草で覆われた山を見下ろしながら、山の頂上から下に向かって、私はゆっくりと滑降していた。

山から下りると、そこには小さな町が広がっていた。町に到着し、地面に降り立った時、再び後ろから声が聞こえた。振り返ると、先ほどの友人だった。私は真っ先に、その友人に対して、先ほど置いて行ってしまったことを謝った。友人は特にそれについて気にしている様子はなく、それよりも空を飛びたいという思いが強いようだった。空を飛ぶ方法を教えて欲しいと友人が強く嘆願してきたため、私はその方法を教えることにした。

私:「例えば、10mのプールの底から水面に上がるために足をバタつかせるよね？」

友人:「うん」

私:「それだけだよ」

友人:「えっ？それだけ？」

私:「うん、それだけ。それができれば空も飛べる」

友人と私はそのようなやり取りをしていた。私の説明はとても不親切なように思えて、完全に的を得ていた。空を飛ぶ方法に関して、実はそれ以外のコツなどない。水面下から水面に出るために足を動かすのと同じ要領で足を動かせば、空を簡単に飛ぶことができるのだ。

あまりにも簡単な方法だと知って友人は驚いていたが、そうした簡単な方法であるにもかかわらず、あまりにも多くの人が空を飛べないことを私は知っていた。

私:「とはいえ、少し練習が必要だね」

友人:「うん、そう思う。ちょっと実際に飛ぶところを見せてくれない？」

先ほど、大型のトラックが後ろから追いかけてきた時は、緊急事態であり、急いで高度を上げる必要があったので、バタ足を用いて高度を上げたが、友人に手本を見せる時には、平泳ぎと同じ要領で足を動かして空に浮かんだ。友人は、私の飛ぶ姿に感動しているようであり、今度は友人に実践をしてもらうように促した。しかし、友人はもう一度手本を見せて欲しいとお願いをしてきたので、向こう側に見えた10階建てのマンションを私は指差した。

私:「じゃあ、あのマンションのあの部屋に向かって飛ぶね」

その言葉を残して、私はゆっくりと高度を上げ、そこからは一気に目的のマンションの部屋に向かった。部屋のベランダに到着してみると、その部屋はもぬけの殻だった。すぐさま、友人が玄関からその部屋に入り、改めて驚嘆と感動の念を持って私に話しかけてきた。

友人:「すごいね！少しだけ空の飛び方がわかった気がする」

私:「じゃあ、ちょっと実践をしてみよう。まずはそのベランダからちょっと飛び降りて、高度調節の仕方を掴もう」

友人:「えっ、ちょっと飛び降りるって、ここ10階だよ」

私:「あぁ、そうだったね。だけど、切迫感がないと空を飛ぶことなんてできないよ」

私はそのように述べた。しかし、友人の言うように、いきなりマンションの10階から飛び降りるのも酷な話かもしれないと思い直し、一緒に階段で地上まで降りた。そこで私は改めて、空に浮かぶ方法を彼に教えた。すると、友人は徐々にコツを掴み、しばらくすると見事に空を飛べるようになった。友人は大喜びの表情を見せており、私もとても嬉しかった。

空を飛べるようになった友人と私は、自由にこの世界を飛び回ることにした。もちろん、空を飛べるようになって間もない友人を時折気にかけながら、できるだけゆっくりとした速さで空を飛ぶことにした。

先ほど私が訪れた大海原と雲ひとつない黄金色に輝く空を友人に見せたくて、私はその場所に向かって飛ぶことにした。海岸から10kmほど沖合の空を飛行している最中、平穏な海の水面に何匹かの巨大なサメがいることがわかった。

友人が高度を下げ、興味本位でそれらのサメに近寄って行った。友人はまだ高度の上げ下げが上手くできないようであり、高度を上げるべきところで下げてしまう癖があることを私は知っていた。そんな状態で水面を泳ぐサメに近づくのは危険だと思っていたが、そうした心配よりも先に、友人はもう水面付近にいた。

背びれしか見えなかったがサメが、水面に潜り、サメの姿は見えなくなった。友人が水面に迫った瞬間に、サメが突然姿を現し、大きな口を開け、友人を食べようとした。その瞬間に、私は友人の手を引っ張り上げ、彼を間一髪のところで救った。そこで私は高度調節の方法をもう一度教え、彼は身の危険を持って多くのことを学んだようだった。また、今のところ、自分でも新幹線ほどの速さでしか飛べないことを友人に伝え、速度の限界についても教えた。

© YOHEI KATO 2018

そこから私たちは、自分たちが見てみたい世界を自由に訪れ、最後は別々の世界に向かって飛び立つことにした。そこで夢から覚めた。

この夢も様々なことを暗示しているように思える。多くのことをここで書き留めることをしないが、人は誰でも自由に空を飛べるにもかかわらず、その事実に気付かず、空を飛ぶ方法を知らないということは、この現代社会に生きる私たちのある側面を如実に映し出しているのではないだろうか。

夢の中の友人のように、誰でも自由に空を飛びたいという思いがあるはずである。実際には、それを行える自由も私たちにはあるのだ。だが、そうした自由はことごとく、この社会では隠蔽されてしまっている。もしかすると、私たちの頭上に広大な空が広がっていることにさえ気づけなくなってしまっているのかもしれない。

夢の中の友人が、空に気づき、空など飛ぶことができないという社会によって構成された自分の思い込みを乗り越え、実際に空を自由に飛べるようになった姿は、大きな感動を私にもたらした。

私たちは日々の生活の中で、いついかなる時も、頭上には広大な空が広がっていることを忘れてはいないだろうか？そして、私たちは大空を自由に飛べる自由を常に持っており、大空を自由に飛ぶ方法をいつでも獲得することができるのだ、ということを忘れてはいないだろうか？2017/9/22（金）09:57

No.218: Ceaseless Diary

I am ceaselessly keeping a diary everyday. I am doing it whenever a diary encourages me to do so. I am curious about what the final product looks like after my continuous writings. I have no goals, but there is only my lurid curiosity behind my personal writings.

Descartes used to live in the Netherlands, and he kept writing. Arimasa Mori, a Japanese philosopher, kept a ceaseless diary in Paris.

Wherever I live, I will keep a diary, too. I envisage keeping a diary in the US after the two years in Groningen. The destiny in my life would navigate me to where I should be. 10:15, Saturday, 9/23/2017

1573. 作曲と数学

フローニンゲン大学の二年目のプログラムにおける第二週の金曜日が、充実さと共に静かに終わりに近づいている。振り返ってみると、今日は普段より幾分遅い時間に起床したにもかかわらず、予定していた全ての仕事を無事に完遂することができた。中でも、来年の五月末から六月の頭にかけて開催される、国際ジャン・ピアジェ学会の応募書類をほぼ完成させることができたのは喜ばしい。本来であれば、昨日にこの書類を完成させようと思っていたのだが、昨日はその他の仕事で手一杯となり、書類の作成に全く着手できなかった。

先ほど無事に書類のドラフトを作成することができた。今後のいかなる学会においても、単なる聴衆ではなく、研究発表者として参加するという意志が強くあり、今回の学会でも発表者として応募書類を作成する必要があった。

昨年に行った研究成果をこの学会で発表できればと思っている。応募書類の要項を確認すると、研究論文の要旨を200字以内でまとめ、研究全体の要約を1000字でまとめることが要求されている。200字の要旨に関しては、研究論文を執筆した際の“abstract”をそのまま用いればよかったが、研究全体の要約はよく練る必要があった。そもそも研究の背景、リサーチクエスチョン、研究手法と研究の進め方の説明、研究結果、研究のインプリケーションの五つの項目を盛り込む形で、要約を作成していった。

とりあず最初の草稿では、1053字と規定の字数を少し超えてしまったが、一旦文章を寝かして、また数日後に編集を行いたいと思う。とりあえず草稿が出来上がったため、今は一安心している。

今日も夕方に作曲実践を行っていた。作曲のプロセスは、よく数学の数式を解くことやパズルを解くことに喩えられる。確かに、そうした側面は強くあり、今日の実践の中でもそのようなことを感じていた。特に、一つ一つ論理的なステップを辿っていくことが、作曲を行うことと数式やパズルを解くことの共通点だと思う。一方で、相違点についても気づくことができる。

作曲に関しては、確かに一つ一つ論理的なステップを辿ることを特徴としながらも、一つ一つのステップを経るごとに、何かを創造しているという感覚が強く内側に現れる。一方、現在でも科学研究の中で数式を用いることがあるが、数式を一つ一つ解いていくステップは、文字通り、何かを紐解く

という感覚が強く、何かを創造するという感覚はそれほどない。もちろん、数式モデルを立てるというのは、創造的な感覚を多分に引き起こすが、数式を解くというプロセスにおいては、そうした感覚はほとんど起こらない。作曲を行うことと数式を解くことの間には、そのような身体感覚の違いがあるように思える。

これから就寝前に向けて、もう数十分ほど作曲実践に取り組もうと思う。そこでもまた、何かを創造するというあの感覚を味わうことができるだろう。2017/9/22(金)21:10

No.219: The Nature of Our Ultimate Actions

It is fine weather today. Its clearness is impeccable. Nature exists as it is. Does nature have any purposes or reasons to exist? Why do people always ask purposes or reasons of our actions?

Of course, I guess that our life is purposeful. However, I want to ask: "Are our actions with specific purposes or reasons really meaningful?" I think that we cannot say yes to the question if our actions are truly purposeful. Who can pick up specific water from water?

Once we can discover purposes or reasons of our actions, they should not be authentic. Probably, they are contaminated by the ideology in our modern society. Hence, our ultimate actions should not be with decorations of purposes but either be purposeless or purposeful. 11:15, Saturday, 9/23/2017

1574. 内にある国民性の解体

今朝は五時に起床し、五時半から今日の仕事を開始した。昨日は普段よりも多い睡眠時間を取っていたが、今日は適度な睡眠時間を取るに留まった。

この二日間の一日の終わりの時点における身体状態に着目してみると、取るべき睡眠時間の差が如実になる。一昨日の夜は、自分の内側でそれ以上の探究活動を拒むものがありながらも、そこからさらに探究を進め、身体全体が重くなっているのを感じていた。特にそれを直截的に感じていたのは脳においてである。一方、昨夜はそのような重さを脳に感じることはなく、一日を通じて適切な量と質の活動に従事していたのだとわかる。

ここでも改めて、最適な量と質の活動に従事することの重要性に気づく。自分の仕事の時間的射程を考えた場合、日々の活動を詰め込む形で推し進めていくのは得策ではない。とにかく継続性に重点を置き、自分の内側に余白を作りながら日々の活動に従事していくことが大事になるだろう。今日から週末を迎えるが、土日における仕事の進め方は特に意識していこうと思う。

今日は午前中に、「評価研究の理論と手法」のコースで取り上げられている“Experimental and Quasi-Experimental Designs for Generalized Causal Inference (2002)”の第六章と第八章を読む。とりわけ第六章は時系列データの取り扱いに関するものであるから、これまで行ってきたダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの研究手法と関連付けて読み進めることができるだろう。二つの章を読み終えることができれば、このコースで取り扱われる課題文献の再読が全て終わる。

コース開始後、二週間が経とうしているこの時期に再読が終わるというのは良い学習ペースだと思う。実際には、最初の二週で取り上げられた箇所については三回目の読みを行っているため、探究の進め方としては申し分ないだろう。最初から細部を押さえていくような読み方ではなく、何度も上塗りをしながら理解を深めていく読みを今後も心がけていく。

フローニンゲン大学での二年目の生活が始まってから変化があったのは、やはり自分の内側に余白をいかに作るかに関してだ。学習や発達において、余白をいかに自己の内側に設けていくかが鍵を握ることは、以前にも何度か言及している。余白の中に深まりが流入してくる確かな感覚を得て以降、その重要性が一層強く自覚される。

これまでの自分の探究活動は一体何であったのかを省みなければならないほどに強い自覚である。欧米での生活が六年目を迎えて初めて気付いたが、どうもこの問題は日本の文化的特質と強く関係しているように思える。自分を含め、日本人はどうも余白を作ることが苦手なのかもしれない。裏返せば、詰め込み過ぎ、働き過ぎな形で日々を過ごすことが得意なのだ。

自分自身を鑑みてみると、やはり前者は苦手であり、後者は得意だ。自分の精神と身体の深くに根付いたこの国民性を一度解体しなければならない。さもなければ、自分の中で何かが深まっていくことなど実現されようがなく、何かを深める試みに一生涯従事することなどできないだろう。そのようなことを思う。2017/9/23（土）06:03

No.220: 48th Annual Meeting of the Jean Piaget Society

I submitted a proposal to make a paper presentation in the 48th annual meeting of the Jean Piaget Society. The main topic in this conference is the“dynamics of development: Process, (inter-) action, and complexity,” which perfectly matches my scientific interests.

This is my first time to participate in this conference, but I already know some of the key professors to hold symposia. Since I am following the historical lineage of Jean Piaget, I would feel honored if I made a presentation in this conference. 16:12, Saturday, 9/23/2017

1575. 科学研究と主観性

科学研究を進めていく上で様々な方法を選択する場面に直面するたびに、どの方法を活用するのが最も望ましいかを考える。昨年の自分の研究を振り返ってみると、獲得したばかりの研究手法を実際に活用したいという思いが先行することがよくあった。その結果として、実際にはより優れた手法があったとしても、自分が活用したいと思う手法をついつい選びがちな自分がいた。

また、研究を進めていく上で参考にする既存の理論や概念の選択、先行研究の調査に関しても、自分の中の様々な思いを抜きにしては語ることができない。つまり、科学研究において、適用する研究手法や理論を選ぶ際に、主観を避けることなどできないのだということに突き当たる。もちろん、私が昨年に陥っていたように、研究手法に対する望ましくない固執は避けようがあるが、究極的には研究手法の選択には必ず主観が入る。

科学研究が客観的なものだと主張する人をよく見かけるが、実際のところ、科学研究は完全に客観的ではない。また、完全に客観的でありえない。これは手法や理論の選択のみならず、研究結果の解釈の際にも同様のことが言える。科学研究に主観が必ず混入するということを考えてみた時に、重要なことは二つあるように思える。

一つは、主観性を排除することに尽力するよりもむしろ、研究手法や理論の選択、さらには研究結果の解釈に関して、当該研究領域のコミュニティーの確認と承諾を得られるような説明論理を組み立てていくことだ。科学研究の一つの重要な目的である、新たな知を生み出すことに関して、とりわ

け共同体の中の確認と承諾を得ることが、ある意味客観性を担保することにつながる。研究手法や理論の選択、研究結果の解釈に関して、そこにねじれた主観性が混入していないかどうかを検証するために、共同体の視点を取り入れることは重要になるだろう。

現在行っているように、論文アドバイザーとの対話や、学会において他の研究者と対話をすることは、自分の研究に混入している主観性を検証することにつながっている。科学研究において他の研究者やコミュニティーと対話することの意義はここにあるだろう。

もう一つは、主観の先を求めて、主観性をさらに深めていくということにある気がしている。研究手法や理論の選択、結果の解釈に不可避に混入する主観性を歪曲するのではなく、むしろ深めていくのである。この場合、主観性というのは研究者としての思想を指す。様々な研究者と話をする中で改めて思うのは、どの研究者も自分の思想を持っており、実績のある研究者であればあるほどに、深い思想を内に秘めているということだ。

研究の出発点、さらにはその出発点からの歩みの全てが、思想の産物だと言っていいほどである。研究テーマの設定はもちろんのこと、研究手法や理論の選択、結果の解釈に至るまで、どれもがある特定の思想を通じてなされる。この点について考えてみると、研究者としての思想を育み、それが主観的な思想から脱却し、普遍的な思想に到達するほどまでに思想を深めていくことが大事になるのではないかと思う。

また、研究者という個人の次元のみならず、ある特定領域の科学研究を行う共同体の次元で考えてみた時に、そこで共有されているのは集合的な思想である。それをパラダイムと呼ぶこともできるだろうが、結局、集合次元においても、目には見えない思想によって科学研究が影響を受けていることは確かだろう。

上記のようなことを考えていると、科学研究というものが客観的だというのは、随分と間違った解釈だということに気づく。科学研究には主観性が不可避に混入し、科学研究は研究者個人の思想と共同体の思想の産物だと言えるのではないだろうか。2017/9/23（土）06:33

No.221: Cyclic Emulation of Great Composers

I decided to emulate the works of the following composers in a circular way: (1) Edvard Grieg, (2) J. S. Bach, (3) Wolfgang Amadeus Mozart, (4) Ludvig van Beethoven, (5) Franz Schubert, and (6) Muzio Clementi.

I purchased their musical scores before. I used to think that it would be the best to follow Grieg's works first because he has strongly inspired me since I visited his museum in Norway. However, I did not want make my compositional style inclined toward one composer. Hence, I determined to cyclically follow the works of the composers mentioned above.

Of course, I want to add more great composers that have inspired me, but it would be wise to focus on the works of the six composers. I should be careful with referring not to a whole piece of work but to a certain amount of measures of the work──the maximum measures might be 64. The amount would be enough to grasp the unique flavor of their music styles and philosophy.
19:40, Saturday, 9/23/2017

1576. 本当の日本人

これこそがフローニンゲンの秋の空だ、と思わんばかりの空が広がっている。今朝は五時半から仕事を開始し、11時を過ぎたあたりでランニングに出かけた。

ここ最近は、ランニング後にインドネシアンレストランに足を運ぶことが習慣になっていたたため、近所の河川敷を走ることはめっきりなくなっていた。運動する日を少しばかり変更し、今日からは以前のように、週末にもランニングに出かけることにした。

自宅を出発してすぐに目に付いたのは、近所の家の壁に、真っ赤に紅葉した無数の葉が生い茂っていたことである。その鮮やかな赤色に、私は思わず息を飲んだ。気づかないうちに、もう秋はとうの昔にやってきていたのである。近所の河川敷は以前と変わらずにのどかであり、犬の散歩をする人や河川敷で釣りをしている人などを見かけた。

ランニングの途中、思考が無になり、思考空間に空白が生まれた。そこに染み渡るように一つの考えが湧いてきた。余白を作る意義というのは、まさにここにあるのだと思った。私たちが向き合うべき重要なテーマとは、こうした余白から滲み出してくるものなのだ。

逆に言えば、こうした余白が自己の内側になければ、私たちは自分にとって大切な問題と向き合うことなどできないだろう。その時に余白に滲み出してきた考えは、自分個人の問題が日本の問題と一致するということだった。それに付随して、国籍の問題が現れた。両者はともに、自分にとって密接に結びついた問題だ。

欧米で生活をしていると、当然ながら時に国籍を尋ねられることがある。また、公的書類にも国籍の記載が求められることが度々ある。そのたびに私は、ふと自分の国籍について考えることが増えてきた。「考える」と言っても、「国籍とは何だろうか？」「自分にとって国籍とは何か？」という問いだけが自分の内側を流れるだけだ。だが、こうした流れを何度も経験してきたためか、先ほどのランニングの途中に、この問いに立ち止まらざるをえなくなった。

法律上の国籍などあってないようなものである。それは確かに重要な事柄ではあるが、私が問題にしていたのはそのような点ではない。自分が日本人足りえるか、という問題であり、どのようにすれば真の日本人だと言えるのか、という問題である。

欧米での生活が六年目を迎える頃、自分の中で少しばかり顕著な変化があった。それは、自分の問題が日本の問題と根底でつながっていることへの強い自覚が芽生えたことである。その自覚によって、自分が真に日本人になりつつあることを実感し始めたのである。今までは、単に法的な意味で日本人という衣を着せられているだけであり、中身は何もなかったのだということに気づかされる。

ある人間がその国の人間になるというのは、その人物の個人的な問題とその国の問題がつながっているということを根本条件とし、当人にその自覚が起こるかどうかにかかっているような気がしてならない。そうした意味で、私はようやく自分の国籍が日本人だと言えるようになりつつある。

ランニングの足を前に進めるごとに、私はなぜこのような問題をオランダで考えているのか不思議に思った。いや、日本の外にいるがゆえに、そのようなことを考えるのは当然なのかもしれない。日本

の外にいて、日本の内のことを考えることは必然なことなのかもしれない。身体的に外にいるというよりも、精神的に外にいるからこそ、精神的に日本の内を捉えることができるのだ。

上記のような観点を用いて考えてみると、真に日本国籍を持つ日本人を私はほとんど見かけないことに気づく。本当の日本人を見ないことはいつも残念に思う。真の日本人は、個人の内面の問題が日本の問題と完全に一致するはずなのだ。

日本にいながらにして、精神的に外側に出て、そこからさらに内側に戻る形で我が国の問題を掴み直すことは、やはり難しいことなのかもしれない。だが、それをしなければ、日本に日本人はいなくなる。2017/9/23(土)13:07

No.222: Location of Responsibility for Adult Education

While listing up stakeholders who are responsible for the quality of primary and secondary education, I suddenly came up with a question. It is: “Who are stakeholders for adult education?” I was thinking about the location of responsibility for adult education in this modern society.

I thought that there would be two issues. One is that the location of responsibility is vague, and the other is that nobody takes responsibility for adult education. I doubt that modern adults are ethically and morally mature; I might say that they are intellectually immature.

We need a new type of adult education so that we can tackle the modern societal issues. It should provide us with robust knowledge and skills and transform ourselves not in a nominal and symbolic sense but in a substantial and practical sense. We should clarify the location of responsibility for adult education and take responsibility for ourselves to emancipate us. 11:09, Sunday, 9/24/2017

1577. 目的や理由のない行為と共に

ランニングから戻ってきて、先ほど昼食を済ませた。秋晴れのフローニンゲンの空を食卓の窓越しに眺めながら摂る食事は格別だ。

この場所でしか考えられぬこと、この場所でしか感じられぬことと、今は存分に向き合いたいと思う。いや、そうした思考や感覚と向き合うというよりも、それらを存分に享受したいという思いの方が強い。

私はこの街を愛している。しかし、この街にずっといられないことを知っている。

先ほどのランニング中にも、何かの始まりは即終わりを内に抱えているという問題にぶつかっていた。始まりと終わりの両方を超えていく必要が私にはあった。しかし、この問題への向き合い方の答えはまだ自分にはない。何かが始まったことを無視するわけにはいかず、何かの始まりと共に終わりを意識せずにはいられない。

始まりと終わりを超えた何かを自分の内側で明確にしなければならない。その何かは永遠なものであることは間違いないだろう。だが、それが存在に触れる形で知覚することはまだ難しい。

フローニンゲンでの二年目の生活が始まって一ヶ月が経った。もうすでに、この街にいられる期間は一年を切っている。昨年の考えから二転三転して、今のところはオランダでの二年間が終わったら、米国に戻ろうと思っている。次の街には五年から十年ほど落ち着き、再び欧州のどこかの国に戻ってきたいと考えている。このような計画は今後どのようにも変わりうるだろうが、今はそのような考えを持っている。

ランニングに出かける前に、行為をなす目的や理由を問われた時に、多くの人はどうして易々とそれに回答することができるのだろうか、ということに疑問を持っていた。人に行為をなす理由や目的を問われ、それについて簡単に目的や理由を答えることができてしまうほどの行為にしか従事していないのだろうか。そのような行為に果たして本当の意味はあるのだろうか。

「目的や理由を持って行動せよ」というのは、単なる通説にもかかわらず、それを自らの行為の全てに当てはめようとしてはいないだろうか。行為をなす目的や理由を問われ、それについて反射的に何かを口に出した時、その答えの浅薄さに哀しみを覚えたことはないだろうか。あるいは、ちょっとした違和感であってもいい。そうした感情や感覚に襲われたことが誰しもあるだろう。そうした経験がなければ、もう取り返しのつかないほどに、目的絶対主義に絡め取られた日々を送っていることになるだろう。

© YOHEI KATO 2018

自分が日々なす行為について、目的や理由を問われると、正直なところ、私は何も答えることができないと思う。要するに、自分の日々の活動の一つ一つには、人に尋ねられて答えられるような明確な目的や理由などないのである。であるからして、全ての行為が究極的な目的と理由のもとになされていることを知る。

究極的なものに目的や理由などなく、それはもはや名付けようのないものなのではないだろうか。他の多くの人たちが、美辞麗句に飾り立てられた目的と理由のもとに日々の行為を営んでいたとしても、私は名付けようのない目的と理由と共に日々の行為を営みたいと思う。2017/9/23(土)13:32

No.223: Endemic Self-Deception

I can see endemic self-deception in this society. We are living with self-deception unconsciously. The society guilefully forces us to deceive ourselves.

Unfortunately, most of us cannot notice it. As a result, we can easily see a number of words and dialogue saturated with self-deception. 11:17, Sunday, 9/24/2017

1578. 伝えようとする意志

先ほど無事に、来年の5/31から6/2にかけてアムステルダムで開催される、国際ジャン・ピアジェ学会の論文発表の部に応募する書類を提出した。今回の内容は、昨年の修士課程での研究が元になっている。

応募書類の申し込み期限は12月中旬と随分先だったのだが、その時期には他の仕事が立て込むことが予想されたため、早めに提出することにした。無事に提出を終え、後は応募結果を待つだけである。

ピアジェに端を発する発達心理学の歴史的系譜を辿る一人の研究者として、この学会で自分の研究を発表できたらとても栄誉なことである。今から結果が楽しみだ。

昼食を摂った後、休憩がてらに作曲実践を行っていた。具体的には、シューベルトの曲を範とし、コードトーンだけを抜き出すことを行っていた。その後、抜き出されたコードトーンを元に、独自の曲を生

み出す試みに従事した。分析をしたシューベルトの曲の構造は実にシンプルでありながらも、極めて美しい音楽を奏でる。このようにとてもシンプルに思える外見から、あのように恍惚的な美しさを持った曲が生まれるというのは実に神秘的である。

おそらく自分が辿るであろうプロセスを書き留めておくと、まずはいかにシンプルな構造から美を創出するかに焦点が当てられるように思う。このプロセスの中で、一つ一つの作曲技法を確かめるかのように、多くの技術を組み合わせるのではなく、できる限り数の少ない技術を用いて曲を生み出していく。その過程を経る中で、徐々に一つ一つの技術を高めていくのである。

この過程を通じて、おそらく同時に音楽理論に関する理解もより深まっていくだろう。この段階を経た後に、単純さから美を生み出すことから一旦離れ、複雑さが生み出す特殊な美の創出に向けて作曲を行っていきたい。ここで述べている複雑さというのは、複数の作曲技術や音楽理論が一つの曲の中に重層的な構造を持つことを指す。そうした重層的な構造から生み出される特殊な建築美を求めることを次の段階としたい。

最初の段階にどれだけの年数がかかるかわからず、ましてや次の段階にどれだけの年月を要するのか見当がつかない。しかし、二番目の段階の後に待っているのは、再びシンプルさに回帰することだろうと予感している。シンプルさを経て複雑性に至り、複雑性からまたシンプルさに戻るのだ。おそらく、その過程を経た後に生み出される美は、最初の段階の美とは質的に異なったものになるだろう。

先ほどの作曲実践から改めて学ばせられたのは、今このようにして自然言語を用いているのとは根本的に異なった表現形式で、自分の考えや感覚を形にすることが可能なことだ。自然言語はどうしても線形的なプロセスを経て、自分の思考や感覚を伝えることになるが、音楽という表現形式は非線形的に相手に何かを伝えることができるのではないかと思う。

もちろん、自然言語の中にも、詩的言語のように、線形性を崩す形で意味を伝えようとする表現形式があるのは確かだが、それでも自然言語における制約を完全に乗り越えることはできない。

最近ふと思うのは、自分が作曲を始めたのは、どうも私的な理由のみならず、様々な表現形式でこの世界に何かを発していくことが求められているという感覚があったからだろう。文章だけでは伝わ

らないことを作曲によって伝えようとし、作曲だけでは伝わらないことを文章で伝えようとする強い意志が自分の中に渦巻いている。2017/9/23(土)16:32

No.224: Nominal Literacy VS Practical Literacy

Some of you might be familiar with the fact that Japan is one of the best countries in terms of literacy rate. In fact, almost all of the Japanese adults have literacy skills. However, their literacy can be called as "nominal" literacy that is so naive and fragile for our emancipation.

Furthermore, that kind of immature literacy cannot solve any social issues accumulated in the Japanese society. It is often heard that Japanese people do not have their own voices──more accurately, it is not so deft for Japanese people to articulate their thoughts and feelings.

One of the underlying factors of this issue could be the current educational practice in Japan to develop nominal literacy. Education aiming to facilitate nominal literacy encourages people to accept others' thoughts without questioning. It also compels people to write without expressing their authentic thoughts and feelings. This kind of education impedes emancipation, and in fact, it confines people and suffocates their true voices.

I insist that Japan should implement a new type of educational practice to develop not nominal literacy but "practical literacy" that can emancipate people and enable them to tackle social issues. 13:17, Sunday, 9/24/2017

1579. 霧と内的純化過程

昨日は早朝の五時に起床し、五時半から仕事を開始したが、今日は七時に起床し、七時半から仕事を開始することになった。就寝する時間は十時と一定なのだが、睡眠時間に変動がある。その要因は、昨日考えていたこととはどうやら別のものかもしれないと思うようになった。あるいは、昨日考えていた要因以外にも別の要因があるかもしれない。つまり、内側に余白を設けることをせずに、一日の最後に全身が重くなる場合に睡眠時間が増えるということ以外に、その他の要因が考えられるかもしれないということである。

実際に昨日は、うまく余白を内側に作りながら一日を過ごしていた。その結果として、就寝前の身体は軽やかであり、入眠も速やかであった。だが、結果として随分と多くの睡眠時間を取っている自分がいた。今朝の起床時にこの点について考えていると、その要因として、自分の肉体的身体を超えたところで、何かをゆっくりと消化させているからではないか、という考えが浮かんだ。

時間をかけて何を消化しているかというと、その日に得られた知識や経験のみならず、むしろそれまでに培った知識と経験を緩やかに発酵させることを行っているのではないか、と思うに至った。これは顕在意識下でなされていることではなく、無意識下でなされていることである。それゆえに、顕在意識下での身体の重さとは関係ないところで、そうした発酵作業がなされているという説明は、随分納得がいく。

今朝の睡眠時間が長かったのは、昨日に得られた知識や経験を咀嚼しているというよりもむしろ、これまで培ってきた知識と経験を時の発酵過程にさらし、それらを緩やかに咀嚼していたからだったのではないか。私たちの知識や経験が真に身になるというのは、こうした経過を経なければならないのかもしれない。おそらく、そうしなければならないのだろう。

知識と経験が深層部分で発酵されていく過程を経験したためか、今朝は目覚めと共に、心身ともに申し分ない状態であった。昨日よりも二時間ほど遅い一日のスタートとなったため、必然的に仕事に取り掛かる時間もその分だけ伸びた。ただし、起床時間がずれた分だけ、目覚めた瞬間に広がる世界が闇ではなく、幻想的な霧の世界を拝むことができた。先週のどこかの日と同じように、今日も霧が深い。

日曜日の朝ということもあり、辺りはいつも以上に静寂であり、一羽の鳥の鳴き声がどこからともなく断続的に聞こえてくるぐらいの音しかない。自分の中で不必要な焦りが消え、全てを緩やかに進行させようとする態度が芽生えたのは喜ばしい。

確かに、日々の生活において、絶えず読むことと書くことに従事していることに変わりはないが、そうした活動に従事する態度が根本的に変容を遂げたがゆえに、日々の足取りがこれまで以上に確かなものになっているという実感がある。これまでの私は、どうやら何かに対して無意識的な焦りを感じており、とりわけ知識というものを詰め込む形で毎日を過ごしていたように思う。次から次に学術論

文を読み、次から次に専門書を読むという形でしか毎日を送ることができなかったのが以前の私の姿である。しかし今は、「余白」という概念が身体知となり、その知を通じて日々の生活を営むことができている。今日もそうした形で一日を過ごすことにしたい。

気がつくと、辺りの霧が晴れ渡っていた。幻想的な霧の世界から顔を出したのは、さらに幻想的なフローニンゲンの日曜日のありふれた姿だった。霧そのものとそれが晴れ渡る光景を眺めた時、自分の内側に濾過されぬまま漂っていたものが純化された姿を見て取った。2017/9/24(日)08:08

No.225: How to Imbue My Thoughts and Feelings into Music

Before going to bed last night, I was thinking about how to instill my thoughts and feelings into music. The background of this question is that I am currently composing music just by logical procedures.

I have no idea of how to imbue my thoughts and feelings into my music. Of course, music theory is indispensable to my music composition. In addition, emulating past masterpieces is a fundamental method to compose music. However, I am confronting the issue of how to embody my existence in music even if I imitate great composers' works.

Today's practice would be a small but crucial step to solve this issue. 13:26, Sunday, 9/24/2017

1580. つまらない文章と思考と感覚が萎縮した人々

今日の目覚めは普段よりも遅かったが、午前中に取り掛かりたいと思っているのは、明日に参加する二つのクラスで取り上げられる論文と専門書の該当箇所を読み返すことである。

今学期に履修しているコースは三つだが、クラスが行われる前日には、そのクラスで取り上げられる論文と専門書を読み返すことが習慣になっている。この習慣のおかげもあり、クラスに参加する前には三回目の読みが完了している。自らの性格が反映されるのであろうか、クラスが終わったその日に再び簡単に文献を読み返すということをしつこく行う自分がいる。愚直にしつこく繰り返すことが、自分の知識体系を確固たるものにすることにつながっていく。

日記を少し書き留めた後に、今日の午前中に取り掛かるのは、まさにそうしたしつこい再読である。逆に言えば、こうした反復がなければ、何かが自分の身になることはないだろう。

再読のたびに、自分の内側に、知識の通った跡が確かに存在していると知覚されるのは面白い。内側に刻み込まれた知識というのは、それほどまでに可視的なものなのだと思う。おそらく、このようにして獲得された知識は、文章を書く際や話す際に自ずと滲み出てくるものになるだろう。一方で、そのようにして獲得されなかった知識は、浅薄さの衣をまとった形で外側に顕現するだろう。そのようなことを思う。

日曜日の朝を開始するためにコーヒーを入れようと思った矢先、つまらない文章について考えていた。人に読まれる文章というのは、徹頭徹尾、人に読んでもらうために書かれなければならない。これはとても当たり前なことなのだが、どうもこの当たり前さを取り違えると、つまらない文章が出来上がるのではないかと考えていた。これは私自身も過去にずっと経験していたことだが、人に読んでもらうために書いた文章がなぜだかとてもつまらないのだ。

自分で読んでいてもつまらないし、下手をすると書いている最中からそのような気分が出てくる。しかし、そうした感情を、ある意味隠蔽しながら文章を書くことが長く続いていたように思う。ここで私自身が面白いと感じる文章について思いを馳せていると、こちらを引き込む文章の書き手はことごとく、確かに読み手を意識していながらも、その意識に過度に捕まることなく、普遍的な事柄を個人的な考えや感覚を基に文章の形にしていくことができていることに気づいた。

要するに、文章の素材は極めて主観的に生み出されたものでありながらも、その主観性を普遍性にまで昇華する洞察力を発揮し、昇華された普遍的な事柄が内包された文章は、読んでいてとても面白く感じるのだ。つまらない文章の書き手はおそらく、客観性を確保するという誘惑に飲まれ、客観的にあろうとするあまり、実は自分にとって大切な主観的な事柄を文章に盛り込めなくなってしまうことが多々あるのでははないかと思う。

人に読んでもらおうと思って文章を書こうと身構えた瞬間、大切な主観的な思考や感覚が萎縮してしまうのだ。萎縮してしまった文章はつまらない。ことごとくつまらない。

© YOHEI KATO 2018

究極的には、人に読まれるか否かなどはもはや関係なく、主観的な事柄が普遍性に至る過程を歩んでいるかどうかが重要に思えてくる。そうした過程を歩むためには、ここでもう一度、自分の純粋な思考や感覚に立ち返る必要があるだろう。

現代に生きる大多数の人々は、自らの思考や感覚が萎縮しすぎているのではないだろうか。2017/9/24(日)08:43

No.226: Importance of Melodies

I obtained several essential hints about music composition from my friend who is a pianist. She gave me new perspectives of how to arrange past masterpieces and how to create unique works.

On the basis of her advice, I decided to seek for my ways to create unique melodies. Keeping track of inspirational motifs and themes in previous masterpieces would be beneficial practice for creating my melodies. 21:47, Sunday, 9/24/2017